

意味があれば価値があるだろうか

Since it is meaningful, is it truly valuable ?

富田 直秀

TOMITA, Naohide

京都大学大学院工学研究科医療工学分野教授



1. はじめに（学者に求められる自己破壊）

現代の学者には、自己破壊が求められているのだと思う。なぜ、学者が自分を壊す必要があると考えるのか。まず第一に、自身を成立させているフレームワークを壊さないコミュニケーションは教示または討論であって、自分を壊してこそ初めて対話（dialog）が成立するからである。教示や討論のみでは文化は成立しない。たとえば、筆者は芸術大学における様々な授業やプロジェクトに参加をしているが、垣間見られる芸術家たちのぶつかり合いは、時としてその人が立脚している最も基本的な立ち位置を徹底的に破壊する激しいものであることに驚かされる。しかし、たいていすぐに、またもとの仲のよい関係性に戻っている。「わかる」といった意味だけではなく、価値の創造に関わる現場では、このような徹底的な破壊と創造が日常でなければならないのだろう。あらゆる分野の学問において「文化」との関わりが重要になりつつある現代では、学者も、自身を成立させているフレームワークの破壊に対して何らかの準備が必要なのだろうと思う。

また、矛盾や対立の統一から問題を解決する、いわゆる弁証法的方法論のみでは複雑な現代の問題に対処できなくなっている。これに関しては後述するが、たとえば、筆者の専門である医療技術開発の分野では、本来、医療の終わりに結果としてあるはずの「健康」が、記号化・意味化されて技術の目的となったことによって、実感を離れた健康観が消費社会の中で一人歩きを始め、治療技術開発は終わりのない循環過程の中に入り込んでいる。診断や治療方法の開発は、合理的かつ精力的に進められているが、そのゴールにある健康観の肥大と希薄化に対しては、専門家さえ、いや専門家こそが盲目である。たとえば、治療法はあるけれども経済社会的に治療を受けることのできない、という現代の姥捨て問題や、「無駄」と特定できない医療行為の増大による経済圧迫や医源病の増加は様々な場面で悪循環を生み始めている。もちろん病気や病気に

至る経路を意味化して、その対立点を発見していく科学的方法の有用性に変わりはないが、その作業の前に、イキモノや社会の多様性を目利きする力が学者にも求められている。それは単に社会情勢を知る、ということではなく、我々がどのようにして多様性の中に、意味と価値とを見出しているのか、という根本的な洞察である。意味があれば価値があることを当然の前提とした科学的な方法論そのものにも、破壊と創造が求められているのである。

2. いわゆる消費社会（たとえば医療分野では）

ボードリヤール（Jean Baudrillard）が、「欲望が抑制されることによってではなく、むしろ、充足されてしまったということによって、われわれは、われわれ自身の欲望を、いわば接収されてしまったⁱ」と述べたように、多くの知識人が、いわゆる消費社会における現代人の危うさを述べている。前述のように、医療工学分野においても、本来、医療の終わりにあったはずの健康が、記号化されて、その充足が精力的に進められた結果、治療が終わりのない循環過程の中に入り込んでしまった。医療では、一見小さな症状でも本人にとっては重大であり、また逆に一見重大な症状でも放置すべき症状はあり得る。このQOL（Quality of Life）と症状判断の難しさと閉鎖性のために、記号化された健康観は今も肯定性に守られながら肥満化を続けている。また、確実な証拠を基盤とした医療評価EBM（Evidence Based Medicine）の充実と市場原理の相乗は、だれもが有している（症例数の多い）不定愁訴に対する治療法の実用化が結果的に優先される傾向も生んでいる。有効な治療法が無い医療ニーズ未充足医療領域（Unmet Medical Needs）の優遇などの政策や、学会から社会への提言、研究の社会実装など、一見、知識人たちは問題や矛盾に合理的に対峙しているようであって、その内なる他者性欠如の問題が見えていないまま、つまり、それぞれの主体の自立にとって何が本当に重要であるかが見定まらないままに、健康欲求を補う活動自体も、合理的な肯定性に囲まれてさらに肥大化しつつある。

3. 意味化の功罪

ボードリヤールはさらに、「技術のたいへんな進歩の結果、われわれは、あまりに高度な現実と客観性の段階にたどり着いたのです。（中略）そのような状況

ⁱ 「カウント・ダウン」対談（世紀末を語る―あるいは消費社会の行方について）より

は、これまで慣れ親しんできた現実の景色よりも、はるかにわれわれを不安に陥れ、当惑させることになるでしょう」と述べている。われわれ「学者」が社会に発信している意味化されたメッセージは、モヤモヤとした概念を透明化する一方で、上記のような社会の過剰な意味化と客観化を象徴的に加速させている。

たとえば、重症病棟において頻繁なナースコールのために疲弊する医療現場の問題ⁱⁱの例をみてみよう。入院ベットには、緊急時などにナースを呼ぶためのナースコールが設置されており、患者の急変や苦痛に対処する看護の一つの要となっている。しかし、このナースコールを頻繁に押す患者のために、現場が疲弊してしまう場面がある。病棟の夜は、時として意味的な希望を消滅させ、モヤモヤとした苦痛の悪循環を創り出す場となるのである。一般には、痛みに対しては鎮痛剤、不眠に対しては眠剤、不安に対しては抗不安薬が処方される。これらの行為は、それぞれに意味があり、また、それぞれの治療薬の効果は、定量化されたエビデンス評価によって保証されている。しかし、痛み、不眠、不安という意味化された症状のみへの対処は、前述のような意味的な希望を消滅させる病棟の夜の悪循環には無効であるばかりか、たとえば薬剤の習慣性や副作用に対する不信任などから、さらに事態を悪化させる場合さえある。

そんなときに、たとえば、ベットサイドで暖かく患者の手を握る、といった行為が、状況を大きく改善させる場合がある。また、「大丈夫ですよ」という医師の一言が救いとなる場合もある。昔から行われてきたこれらの行動は、意味化された行為が優先され、不確実な言動がかえって訴訟等を引き起こす場合が多い現代においては、現場から消滅しつつある。もちろん、だからといって、たとえば「手を握る」や「大丈夫と言う」行為をマニュアル化、意味化させたらどうだろうか。演技的なスキンシップや言葉にも効果がないとは言い切れないが、自然な、意志的な指示を含まない、むしろ無対処・沈黙に近い関係性にこそ、これらの行動の価値の本質があるのだろう。

4. 意味と価値の関係性の可視化

本来、意味と価値とはまったく異なった次元に属しているのにもかかわらず、意味化が価値を支える場合があれば、また、前項に挙げた例のように逆に意味化が価値を減ずる場合もある。この意味と価値との関係性を論じるためには、ヘーゲルの述べた、即自や対自の概念にまでさかのぼらなければならないだろ

ⁱⁱ 富田直秀「物語の可視化」デザイン学論考 vol.6

う。簡素に表現するならば、世界から見た私と私から見た世界の間関係性に言及しなければならない。しかし、厳密な表現からスタートすると、その表現はすこぶる難解である（筆者にはその能力もない）。この項では、表現の厳密性には目をつむり、意味と価値の関係性を比喩的・実感的に表現した例を利用して考察を進めてみたい。

詩人の吉本隆明は、意味や意思を伝える一般の言語表現が枝葉としての「指示表出」であるとして、言語の幹に近い本質のところには、意識的な意味伝達の視点からみればむしろ無言に近い、自己の存在性から自然に生じてくる言葉があるのだ、と考へ、そこに「自己表出」という言葉を当てはめたⁱⁱⁱ。たとえば、ため息、赤ん坊の泣き声、文学における「行間」、などの言語にも意味を記述することは可能であろうが、それらは意志的に指示された意味ではなく、それぞれの存在性から自然に生じてくる意味である。さらに吉本は、fig.1 のごとく、言語の意味は指示表出の経路で、また、言語の価値は自己表出の経路でかんがえる対象であるとした。後に吉本は、指示表出を五感などの感覚に、そうして自己表出を内臓感覚に結び付けて説明をした。

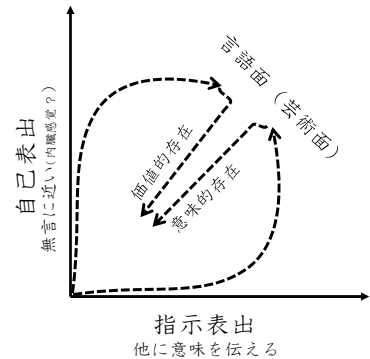


fig.1 指示表出と自己表出

これらの論議で吉本は、(言語世界≒実世界)という前提の上に言語における意味と価値との関係を論じている。しかし、言語世界に人並みはずれた感性和独自性を有していた吉本の論は、言語面に確たる存在感を持たない筆者や多くの人には理解されにくかった。

ここでは、まず、前述の指示表出から得られる意味了解と、そこでかんがえられる意味存在と、自己表出から得られる価値了解と、そこでかんがえられる価値存在を、比喩的に多次元空間に表示してみたい。たとえば、学者が論文掲載にいたるまでに行う査読のやり取りでは、主に言葉の指示表出機能が用いられ、やがて、意味了解の内容を記述した論文という実体と学者である「私」という意味存在（または意味的な存在感）が生じる。これを意味存在の出現として、fig.2に象徴的に示す。

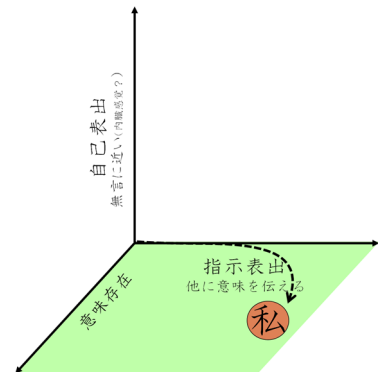


fig.2 指示表出による意味存在の出現

それに対して、先に挙げたナースコールの例における「手をにぎる」という行動は、fig.3の、自己表出による価値的な了解とともに、価値的な存在（または存在感）の出現として比喩的に理解することが可能である。前述

ⁱⁱⁱ 吉本隆明「言語にとって美とはなにか」

のように、「手を握る」という行為をマニュアル化したり、またもっと極端な場合には、手をにぎるロボットなどを作った場合を想像してみると、手をにぎることの価値は客観的に捉えられる動作の中ではなく、行動を介して交わされる関係性の中にあることがわかる。それは、指示的な行動として捉えるならば、むしろ何もしないこと：無に近いところ、にこそ、その本質がある。

この、何もしないこと、が人の価値的な認知に関係する可能性を考察するときに、脳科学分野において最近注目されているデフォルトモードネットワーク（default mode network: DMN）は興味深い示唆を与えてくれる。意味的な作業を何もしないときに脳の前頭葉内側部、頭頂葉内側部などの複数の脳領域の活動の関係性として観察されるDMNは、たとえば、意識的な瞬き時にDMNは活動せず、無意識な瞬き時に活動が見られる。また、高次認知機能や社会脳の特徴である他者の理解、自己の理解を制御する脳機能にも、このDMNが関与している可能性が期待されている^{iv}。このように、吉本が「自己表出」と呼んだ、一見とらえどころのない心の作用にも、科学的な知見が関わる可能性が生じてきている。

さて、fig.2と3に表わしたように、二つのまったく異なる次元でかんがえられてきた意味と価値が、交互に入れ替わる動きをfig.4のごとく結合した空間内に表示してみる。意味的な了解から得られる意味存在と、価値的な了解から得られる価値存在は、fig.4に表示したように、まったく異なる次元に属しながら動的に紙の裏表のようにお互いに補完し合って、我々の日常生活や文化を支えている、と筆者は考えている。この動きのイメージは、たとえば、メルロ・ポンティ（Merleau-Ponty (1908-1961)）が「触れるものと触れられるものの可逆的な関係の中に生起するもの」として存在を表した記述を想起させる。またさらに、脳科学分野では、生理学的変化が情動の自己認知に先駆けて現れることが知られており、また、同じ生理学的変化でも、環境や状況の認知によって生起してくる情動・感情が異なることが知られている。この、「悲しいから泣くのか、泣くから悲しいのか」という議論は、おそらくそのどちらの現象も正しい、といった結論に流れていくの

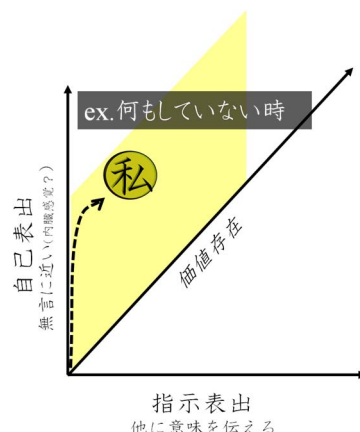


fig.3 自己表出による価値存在の出現

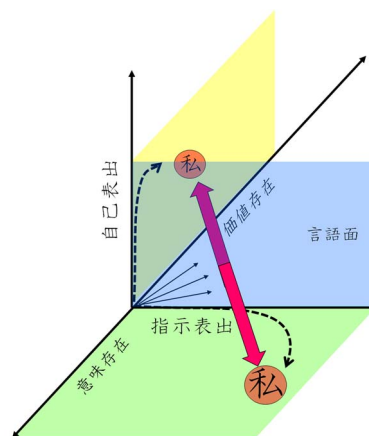


fig.4 意味存在と価値存在の可逆的な動き

^{iv} 別冊日経サイエンス191 「心の迷宮 脳的神秘を探る」: Marcus E. Raichle

だろう^v。この情動二要因の考え方も、やはり比喩的には fig.4 の動きのイメージに類似性を見出すことができる。

くり返すが、表現の厳密性には目をつむり、あくまで比喩的に動きの類似性のみをみるならば、上記のような哲学的、脳科学的な記述の例のみならず、たとえば、鳥瞰図的にながめる鳥の目と生活に密着した虫の目の視線の関係性、前述の医療におけるEBMと患者の物語(narrative)を基盤とするNBM(Narrative Based Medicine) との関係性、演奏の技術と感性の関係性、などなど、多くの意味と価値を伴う例と、fig.4 に象徴的に表されたイメージとの間に共通の「動き」を見出すことができる。

5. 学者のジレンマ（意味理解に偏ったフレームワーク）

意味と価値とが、上記のように紙の面と裏のように、お互いに補完し合いながら、また、世界から見た私と、私から見た世界との間を可逆的に動きながら我々の生活や文化を支えているのだとすると、多くの学問分野で扱われているのは、意味的な空間に偏った構造であって、意味と価値の流れ（構成）には至っていない場合が多い。後述するように、論文の中で客観的事実として扱われている多くは、いわば間主観的事実であって、それは本来の客観的事実の中から複数の観察者が意味的な了解を見出した結果の記述に過ぎない。デザイン学の方法論には、意味的な了解とともに、価値的な了解も必要とされている。前述のごとく、意味理解に大きくシフトしているであろう現代社会において、意味理解と価値理解の間の動きにかい離が生じ始めていると考えると、これからの学者の仕事は、意味化とその記述だけでは不十分である。

一方において、学者が学者であるためには「論文」を執筆しなければならず、論文が論文であるためには、その分野を知ると認められた peer によって、新しい意味が提示されたと認められなければならない。この、something-new-ism と peer review の壁を乗り越えるために、学者は歴史性と厳密性に裏付けられた「意味」を主張することになる。「意味あることは価値があるのだ」という思い込みが、現代の学者たちに受け継がれている一因として、この査読作業に象徴される厳格な意味化作業を挙げることができる。本来、真理探究の一つの経過としてあるはずの「論文化」が、社会的名声や評価とリンクして科学の一つの目的となったことによって、本来の真理探究のモチベーションを離れた科

^v Newton 2016-6 「喜怒哀楽が生まれるわけ」 佐藤弥、大平英樹、久保健一郎

学観が一人歩きをし始めている。本来、客観そのものには意味も価値も含まれておらず、我々は複数の主観の共同化による高次の主観において、つまり間主観的に意味理解と価値理解を得ている。査読作業に象徴される科学的方法論では、共通の意味理解とその記述に重点が置かれており、ここに生じる意味と価値とのバランスの不均衡が、現代における様々な問題にも影響を及ぼしている。

たとえば医療分野では、前述のごとく、Unmet Medical Needs や社会的便益のある技術を優遇する政策、QOL評価の改善、分野を超えたコミュニケーション、など多くの理知的な試みがすでに動き出している。しかし、誰を助けて、誰を助けないのか、という現代の姥捨て問題や、自身の健康を回復させる方法が無い状況と、方法はあるけれども政策によってその使用が制限されている状況のどちらがその人にとって不幸なのだろうか、といった問題に対して、現代科学は戸惑いを隠すことができない。その一因として、前述のように、間主観的な意味理解作業に偏った科学的方法論が、価値理解とその記述を不得手としているからである。蛇足を加えるならば、本論文で取り上げたボードリヤールや吉本隆明は、いずれも詩の言葉（暗喩）を多用してその思想を述べている。それが科学的でない、という批判は至極もつともであるが、科学的でないから本当ではない、とするならばそれは本末転倒である。暗喩とは、現代の科学的方法では記述し得ない価値理解を記述する一つの方法論であって、科学的手続きはなくとも、真理を追究しようとする一つの真摯な手段であることに変わりはない。この意味理解と価値理解の手法は、本来対立すべき対象ではなく、fig4 に象徴的に示したように、紙の裏表のように補完しながら移動する「動き」として捉えることができる。イキモノや社会の高度に発達した多様性の中で、人は動的に意味と価値とを見出して文化を形成しており、現代の学者には、意味理解のみに偏ったフレームワークの破壊と創造とが求められている。具体的には、たとえば、研究のモチベーションと研究内容との関係性を詳細に記述するような方法論も、その第一歩であるのかもしれない。

6. 現代の学者馬鹿（自立の欠如）

昔ながらの学者馬鹿とは、学問を生業とする人の一般知識の狭さや常識の欠如を表していた。しかし、現在では愛すべき古き学者馬鹿はむしろ稀有となつてしまい、私を含めた現代の学者たちは学会活動に産業にマスコミに、手八丁口八丁で社会に関わってきている。彼ら（私）は、間主観的に意味理解された客観的事実もどきを道具として用いて社会の中に自分の位置を築こうとしている。

手八丁口八丁の学者たちに先導されて、文化を失いつつある現代社会はすでに大きな滝の縁にまで至っているのかもしれない。船が滝を急速に落下し始めたならば、学者たちは、いの一番に船上から逃げ出すのだろう。筆者もその一人であろうと思う。現代の学者たちの言はすべて「他人事」として語られているために逃亡も容易である。問題は、我々学者自身が自立を失っているところにあるのではないだろうか。前項のfig.4 に示したように、「私」とは意味了解と価値了解が紙の裏表のようにお互いに補完し合って交互にくり返す動きの中にある。かつての学者馬鹿は学問世界への没頭と共に、この意味了解と価値了解との交換、言い換えれば、意味的な自分とぼんやりとした意味不明の自分の双方を持ち、すなわち世間を知らずともしっかりとした自立の動きの中に生息していた。現代の我々は、一見、広く社会のことを考えているように見えて、すべてが他人事であり、実は本当の自立した自分を見失っているのではないだろうか。この現代の学者馬鹿の中核には、「意味があれば価値がある」という妄信（または言い訳）がある。まずは、この破壊が必要なのだろう。我々が考える以上に、世界の破局は近いのかもしれない。そこに至る前に、一度みなで集まって、意味のみならず価値的な了解を交換してみたらどうだろうか。

7. おわりに

最後に本文章の英語副題名の説明を加えたい。“Since it is meaningful, is it truly valuable?” は、サン＝テグジュペリ (Antoine de Saint Exupéry) 作の「星の王子様」(Le Petit Prince) の14章の中にある言葉の英語直訳 “Since it is beautiful, it is truly useful” をもじったものである。1分間に1回転する小さな星の上で絶えず街灯をつけたたり消したりしている点灯夫 (lamplighter) の星をみて、星の王子様がつぶやいた以下の部分に登場する言葉である。

この点灯夫もおかしな星にすんでいるなあ。けれども、王さまや、うぬぼれ屋や、実業家や、のんべえの星よりは、なんとなくほっとする。この人の仕事には、なにか意味があるにちがいない。街灯に明かりをつけると、星がひとつ生まれたように、花が一輪ぱっと咲いたように見えるし、街灯の明かりを消すと、花や星は眠りについてしまう。ああ、なんてきれいなんだろう。きれいだからこそ、ほんとうに役にたつ仕事なんだ。

(富田の意訳)

「デザイン学」への問い

+ 意味があっても価値のないデザイン、意味が無くても価値があるデザイン